

「いつわりを語る人、自分がしておきながら、「わたくしはしませんでした」と言う人、この両者は悪い展開をもたらす・・・。」

ほつくきょう
『法句経』に出てくる言葉です。

この言葉は、最近よく耳にする国の政治にまつわるさまざまな報道を思い起こさせます。事実を明らかにし、問題の本質やその原因を究明し、きちんと解決されなければならない深刻な問題です。

『法句経』は仏教経典の中でも最も古いものの一つであり、お釈迦さまの肉声に近い言葉が教えとしてまとめられたものといわれておりますので、今も昔も人間が起こす問題は変わらないということなのでしょう。

良くないことだと誰もが分かっているはずなのに、「自分さえ良ければ」という心からついてしまう嘘。そしてその嘘を繕うため、また嘘をついてしまった自分を守るため、嘘に嘘を重ねてしまいます。はじめは小さな嘘であっても次第に大きな嘘になり、自分でも收拾がつかずに取り返しがつかないことになってしまいます。さらに事実を曲げてしまう嘘によって、他の誰かが傷ついてしまうようなことは、避けなければなりません。

こう考えると、私たちはつい自分自身のことを棚に上げて、他の人の嘘ばかりを追求してしまいがちです。

しかし、自分がついた嘘を一番はじめに聞くのは他ならない自分自身の耳であり、自分の嘘によって一番はじめに傷ついているのは自分の心なのです。自分の嘘は、他の誰かを傷つけるだけでなく、自分自身をも傷つけてしまうのです。

『法句経』には、また・・・

「他人の過失を見るなかれ。他人のしたこととしなかったことを見るな。ただ自分のしたこと

『 禅のこころ - 曹洞宗 - 』

としなかったことを見よ。」というお釈迦さまの言葉もあります。他人のことをあれこれ言うのではなく、自分自身を見つめ、自己を調^{ととの}えることの大切さを示されているのです。

日々の生活の中で、社会のことから家庭のことまで大小さまざまな問題が身の回りに起こりますが、まずは自分自身を見つめ、嘘をつかない自分として自らを調えることを第一にしていきたいものです。

私たち一人一人が自分自身を調えることで、きっと社会も調っていくことでしょう。

— 終 —